エコロジカルな回心　―すべてのいのちを守るため―

鹿児島修道院　M.U

久しぶりに鹿児島に戻っての最初のトラブルは、地下トイレの汚水の逆流だった。原因はマキの木。業者に言われるまま、地下の通用口前のマンホールのふたを開けて納得した。マキの木の根が**ヘチマたわし**のような状態でマンホールを埋めていた。幸い、院内の居住者も少なく、朝晩の一時的な現象だったので不自由することなく解決したが、考えさせられた。（業者の話では、よくあることだそうだ。）

このトラブル以来、私にとって修道院の周りの大きな木々は、愛おしいどころか厄介ものに感じられてならない。そんな中、エコロジカルな回心という課題をいただき、祈りと振り返りの日々が続いている。

「清貧」の生活や環境問題への取り組みには、人それぞれの理解や考え方があり、「何をするか」というよりも「どんな心」で生きるかが問われているように思う。したがって、今回のこの課題に対しても、これまで各修道院や他の修道会から紹介された取り組みについて述べることは避けたい。（鹿児島修道院でも多くの取り組みがなされているが、、、。）

回勅「ラウダート･シ」の中で、教皇はほとんど「何をしなさい」とは言わない。どんな心で生きればよいか、心のあり方を述べておられる。回勅が出された後、研修会でよく耳にしたのは、イグナチオの霊操の「原理と基礎」「愛を得るための観想」だった。改めて目を通すと、「私たちは、周りの被造物の中に神の愛（美しさ）を感じとり、その営みの中に神への賛美を聴くことができているか」（愛を得るための観想参照）を問われている。

わたしたち人間が、「神の作品の保護者たれ、との召命を生きることは」（＊217）
まさに、アシジの聖フランシスコが体現した全被造界との兄弟愛を育むことへの挑戦でもある。わたしたちの「信仰の確信は、個々の被造物が神に属する何かを映し出しており、わたしたちに届けられるべき何らかのメッセージを有しているという気づきと、この物質界をその身に受けたキリストは、復活した後、今なお、存在するすべてのものをご自分の愛で包み、その光をもってそれぞれの内部に入り、すべてのものに対して親密な存在でおられるという」（＊２２１）確信である。

冒頭に述べたマキの木について、私はその存在すら意識せず、置かれた場でたくましく成長していたその声に耳を傾けようともしていなかった。無残に切り倒され処分されてしまったマキの木は、一体何が言いたかったのだろうか？周りの被造界（(人々を含む）への関わり方（あり方）の見直しこそが、私に求められるエコロジカルな回心の道である。

（＊217)、（＊221）は回勅「ラウダート･シ」からの引用